



皇居御苑散策

浅野 純次

(経済倶楽部理事)

▼この号が発行される4月第二週には都内の桜はほぼ散つてしまっているでしょうが、もしかすると遅咲きの桜を楽しめそうな場所があります。皇居東御苑（みやぎの東御苑）がそれで、隠れた（先刻ご承知、隠れてなどいえないと言われそうですが）桜の名所です。ここの桜の特徴はソメイヨシノ一色の上野公園や千鳥が淵と違い、山桜、大島桜など30種類に及ぶ老木が咲き競うことで、したがって開花の時期がさまざま、長い期間、楽しめるのが何よりです。3月末に訪れたときも満開であればつまみ状態もあり、4月中旬まで楽しめそうな気がしま

した。

▼東御苑が無料で楽しめる都心の別天地ということでは案外、知られていないのではないのでしょうか。大手門、平川門、北桔橋門（きたはし）の三カ所から出入りできますが（月・金曜を除き9時から4時半頃まで）、やはり江戸城へは正門である大手門からがふさわしい。何より東京駅から近いし、堂々たる大手渡槽門（おほのたりのやぐら）と巨石からなる石垣に敬意を表しながら入るのもいいものです。

▼東御苑は江戸城の本丸、二の丸、三の丸を整備して昭和43年に完成、一般公開されるようになったもので、21万平方メートルという広大な皇居付属庭園です。最大の特徴は多様な樹木、草花を育成していることで、四季折々の変化を楽しめるため、一回行ったからもういいなどということのない豊かな内容をもっています。パリのチュイルリー庭園、ローマのボルゲーゼ庭園、ニューヨークのセントラル公園、みなすばらしいですが、東御苑はある意味でそれ以上と言えるのでは。植

物の「多様性」という点が何より気に入っています。

▼公園で大事なことは「開放性」です。日本の公園は芝生にも立木の下にも「立ち入り禁止」の立て札が無粋にしつこく立てられています。役所の公園管理課あたりの都合でしょうが、欧米の公園庭園は基本的に立ち入り自由で思い思いに人々が座ったり寝転んだりしてひとときを楽しんでいることが多い。市民の財産だという感覚が浸透しているのでしょう。東御苑は広大な本丸大芝生や大奥跡芝生が立ち入り自由で家族連れもののびのび過ごせます。宮内庁も案外オツです。

▼いや、ひよっとしたら皇室がそう希望されたせいかもしれません。実際、野生種主体のバラ園、江戸時代の古品種を集めた果樹園、日中両国の多彩な品種の竹林、消えゆく雑木林の復元など、東御苑の植栽はみな二代天皇の強い意向を受けて進められたそうですから。

▼草木だけでなく建造物も楽しめるのが魅力です。三棟の番所、富士見櫓、諏訪の茶屋、尚蔵館、石室など

ですが、唯一、残念なのが天守台で、明暦の大火で天守閣が焼失した後は再建されずに石垣だけが残っています。大抵の人は天守台上に登ってはみるけれども興趣はもう一つのように……。天守閣再建についてはこの欄で言及しましたが（09年12月号と10年5月号）、木造で復元するとなると1000億円くらいかかるそうです、この財源が必ず問題になります。しかし、寄金を募れば何割かは埋まるでしょう。あとはしばらくの間入館料をとる手もある。外国人観光客の落とすカネも大きいし、伝統的な工法の継承にも役立ちます。

▼天守台上に五層60メートルの天守閣が聳え立つ姿は想像するだけに楽しい。再建されれば外国人観光客が必ず訪れる東京のへそになるでしょう。パリの凱旋門、ロンドンのバッキンガム宮殿、ローマのコロセウム並みの名所になれば観光立国に益することは確実です（そのためにも木造でない）。オリンピック招致のカネに比べたら1000億円、安いものではないでしょうか。